

MTX が生命予後に関与している可能性が示唆された。今後は病型別の治療方針を確立していくためのプロスペクティブな検討が必要である。

(平成 22 年度東京医科大学研究助成金 受給)

P3-51.

視神経炎患者の末梢血単核球サイトカイン産生とステロイド治療に対する反応性の検討

(眼科学)

○平野美恵子、毛塚 剛司、臼井 嘉彦
馬 娟、安 暁明、山川 直之
後藤 浩

(内科学第三)

増田 眞之、加藤 陽久、大塚 敬男
内海 裕也

【目的】 視神経炎患者に対する副腎皮質ステロイド薬（ステロイド）の薬剤感受性を明らかにするために、末梢血単核球（PBMC）由来のサイトカインを測定し、臨床経過との関連性を検討する。

【対象と方法】 対象は活動性のある視神経炎患者 10 例（男性 3 例、女性 7 例）、27 歳～65 歳（平均 42 歳）、平均観察期間は 6.2 か月である。全例ステロイドの投与前に PBMC を採取、分離し、コンカナバリン A（ConA）および異なる濃度のベタメサゾンと 24 時間共培養し、上清中の IFN- γ 、TNF- α 、IL-2、IL-4、IL-6、IL-10、IL-17 を Cytometric Bead Array Flex kit と ELISA 法で測定した。これらのサイトカイン産生量と臨床経過を比較検討した。

【結果】 初診時視力は手動弁から 0.08 で、ステロイド治療後の最高視力は 10 例中 9 例が 0.9 以上であった。ベタメサゾン添加によるサイトカイン産生の減少率と視力の改善は有意に関連していた。ステロイドの平均総投与量はプレドニン換算で $4,460 \pm 2,480$ mg であり、個々の症例の総投与量と培養内ベタメサゾン添加によるサイトカイン産生の減少率には有意な関連性は認めなかった。なお、ベタメサゾンを培養細胞に添加した際に IL-17 産生の減少が乏しかった 1 例は、ステロイド総投与量が 6,000 mg にもかかわらず視力の改善が得られなかったため、血漿交換療法を行い、最終的に視力の改善を得た。

【結論】 in vitro における PBMC のステロイド感受

性試験は、ステロイド治療に対する視力予後判定や、至適治療法を決定するうえで有用な指標となる可能性がある。

P3-52.

ベーチェット病ぶどう膜炎の診断基準確立に向けた統計学解析

(眼科学)

○坂本 俊哉、横井 克俊、松永 芳径
臼井 嘉彦、森 秀樹、毛塚 剛司
坂井 潤一、後藤 浩

【目的】 ベーチェット病（以下 BD）に伴うぶどう膜炎は、サルコイドーシス、Vogt-小柳-原田病について頻度が高く、重要な疾患である。サルコイドーシスについては研究班により「眼サルコイドーシス診断のてびき」が、Vogt-小柳-原田病については国際診断基準が定められており、日常診療でも応用されている。一方、BD については 1987 年厚生省特定疾患ベーチェット病調査研究班から眼症状の診断指針が提示されているが、記載事項は多くのぶどう膜炎に共通してみられる眼所見や眼合併症であり、特異的なものではなく、診断に結び付く内容とはなっていない。

そこで、BD にみられる眼所見の発現頻度と本症を示唆する検査所見の診断的価値を統計学的に解析することによって、他のぶどう膜炎との診断上の差別化を図り、BD にみられるぶどう膜炎の眼科独自の診断基準を確立することを目的とした。

【対象と方法】 2005 年 1 月～2009 年 10 月に当院眼科ぶどう膜外来を受診した BD 患者 106 例とその他のぶどう膜炎患者（対照）89 例を対象とした。診療録をもとに、BD に特徴的な眼所見と BD を示唆する検査所見の診断的価値を検討し、診断的価値が高いと考えられる所見を抽出して診断基準項目を設定する。診断上の感度、特異度を解析し、診断的価値を検討する。

【結果】 ① フルオレセイン蛍光造影（FA）上羊歯の葉様漏出、FA 上びまん性黄斑浮腫 ② びまん性硝子体混濁、前房蓄膿 ③ 両眼性、嚢胞様黄斑浮腫、④ 後極部滲出斑、再発性非肉芽性虹彩炎 ⑤ HLA-B51、以上 5 項目から構成される診断基準項目を作成した。5 項目中 3 項目以上がみられた場合、BD